

# 社会でたくましく生きるための総合的な学習の時間を求めて

## ～「ひと・もの・こと」との出会いを大切に育てる～

矢出 大介

総合的な学習の時間（以下文中は、総合とする）の学習は、事象を単に知識として獲得するだけではなく、「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかがかわらせる中で認識され、それを追究していく過程を通して深化していくものであると考える。子どもたちは、「ひと」との出会いを通して、ひとを好きになる心、ひとと出会い、関わり合うことを楽しみに思う心が育つ。また、「もの」や「こと」を通して社会に生きる人の生き様に触れ、思いや願いを知り、社会の一員として成長していく。今回、有機栽培にこだわって野菜作りに取り組んだ。そこで、子どもにとって魅力あるひとと出会い、有機栽培にこだわり、自分たちの手で育てたお米・野菜を食べることができた。そして、「ひと・もの・こと」との出会いをより魅力的にするための課題を見つけることができた。

キーワード：魅力 追求 ひとり学習 こどものみとり 対話

### 1. 「人・もの・こと」との出会いを通して社

#### 会でたくましく生きる子どもに育てるに

#### は？

子どもたちが楽しくて一生懸命になって活動するためには、もっとこうしたいと思えるように「ひと・もの・こと」との出会いを取り入れた教材開発が必要である。そして、その課題を自分たちの力で乗り越えて、社会的に価値のある目標を実現するという学習活動を体験することが必要となる。学習課題としては、友だちと協同してできることが大切となる。学習課題とは、子どもたちの問題意識から始まり、それぞれに刺激し合う中で思考を深めていくものである。子どもが、課題に対して本気になって取り組めるように直接体験や身体を使い知恵を働かせて努力・工夫したくなる活動を設定していく。

また、魅力的な学習課題と出会い自らその課題にかかわっていくことで、ひとり学習の質が高まっていく。学びの質を高めていく上で、子どもがどのようなひとり学習をしているのかをみとり必要な支援をすることが大切である。子どもが学びを進めているノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握していく。それぞれが調べてきていることにコメントをし、個に応じた支援をすることで、子どもたちの学びを深め、全体学習へとつないでいく。そして、ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習でお互いに伝え合い、吟味を促していく。対話において、他者の考えを聞いて、自分の考えと照らし合わせることを特に大切にしていくことで、考え合うことで学びの質を高めていくことができる。

### 1. 1 魅力ある人との出会い

社会でたくましく生きる子どもに育っていくためには、魅力あるひとに出会うことが大切である。魅力あるひとに出会うことで、「自分もこうなりたい。」「自分ももっとがんばりたい。」「大人になったこんなことをしてみたい。」など、社会に出ていくことに希望をもつことができると考える。今回は、有機栽培にこだわり、JASの有機野菜の認定を受けている農家のFさんに、自分たちの畑を見てもらい、質問をしたりアドバイスをもらった。また、Fさんの畑を見学し、みんなに安心して食べてほしいことや、未来ある子どもたちのために美しい自然を残していきたいという思いなどを聞くことができた。

子どもたちは、自分たちなりに愛情とこだわりをもって育ててきたつもりであったが、Fさんとの出会い、畑を見たり話を聞く中で、「もっとこだわりたい。」「もっと愛情をもって育てたい。」「Fさんのように育てたい。」と思うことができた。

地域の魅力あるひとは直接出会うことにより、学びを高めてくれる素晴らしい指導者になってくれる。そのことが、子どもたちにとって、学ぶための大きなエネルギーになる。素敵な出会いが、人々の願いやこだわりを知るきっかけとなり、その思いに応えたい、近づきたいと子どもの追求する気持ちが高まり、学び合うことができる。

### 1. 2 地域教材を活かしていく

子どもが本気になって学んでいくためには、子どもが何を求めているのかをみとることがとても大切にな

ってくると思う。中学年の子どもが本気に学ぶためには、地域教材であることが、大きな要因の一つである。地域教材は、まさに生活に密着することができる可能性がある。

「ひと・もの・こと」と出会うこともできる。インターネットや本だけの知識ではなく、実際に自分の目で見たり、話を聞いたり、心で感じることもできる。

野菜作りでは、学校の敷地内に地域の人たちが野菜を育てていたり、自分たちが住んでいる周りにも野菜畑がある子どもがほとんどであった。そのため、自分たちが野菜を育てていく中で、問題解決するために畑を観察したり、実際に農家の人に話を聞くことができた。ほんまもんにはふれながら学ぶことができるのも、地域教材の魅力の一つだと考える。

## 2. 学び方の研究

### 2. 1 学び方を学ぶ

3年生の総合では、学んでいく対象を作業的・体験的な学習や問題解決学習を通して、感じたことを中心にできるだけ具体的な「もの・こと」を大切に、学び方を身につけるような学習の工夫を考えた。「学び方を学ぶ」ために、発表、調べ方など、3年生の発達段階にそった指導をしていった。

野菜作りでは、害虫に自分たちの野菜の葉っぱを食べられていた時に、本で調べるだけでなく、実際に知り合いの農家の人に聞いたり、畑をみるなど、足で稼ぐ調べ学習の大切さを学ばせた。(図1)



図1：葉っぱに虫がついていないか確認

### 2. 2 表現・発信を通して成長する

子どもが、野菜を育てる方法を調べたり、課題を解決していただくだけでなく、自分たちの学んだことや活動を地域の人に発信することにした。地域の人に分かりやすく伝えたいという思いで取り組むことで、ひとり

学習の必要性、目的意識、相手意識をもって取り組むことができるのではないかと考えた。また、伝えることにより、自分たちの調べ学習の振り返りもでき、教材を身近に感じるのではないかと考えた。

そこで、附属小学校4年生と大学生とのコラボレーション事業に参加し、自分たちが育てた野菜を地元の人に食べてもらいたいと考えて販売した。自分たちがどのようなこだわりをもって育てたのかを看板やチラシに表現していった。買いにきてくれた人が、買いたくなるようにどうすればいいのかをみんなで話し合っ、準備を進めていった。野菜販売当日は、自分たちがこだわりをもって育てた野菜をみんなに食べてもらいたいという思いをもって、地域の人に声をかけて販売することができた。多くの人の前で表現することで、一人ひとりが自分で考えて行動することができ、表現することの喜びを感じることもできた。野菜販売という発信する立場になることで、地産地消の良さも実感することができた。何よりも、多くの人の前で、発信・表現して野菜を完売できたという成功体験が子どもの自信へとつながった。

### 2. 3 出合いを大切にする

上記でも示したように子どもにとって魅力あるひととの出合いは、今後の生活に大きな影響を及ぼしてくれる。より効果的にするには、指導者になってもらえるようなひととの最初の出合いが、とても重要だと考える。

先生が「一方的にこの人と会いましょう。」と言うのではなく、何か問題が起こったり、子どもたちだけでは解決が難しい壁にぶち当たったりした時に、魅力的なひとと出会うチャンスになる。疑問や問題を解決するためには、どうすればいいのかを投げかけ、子どもたちの中から、「このひとに聞きたい。」「このような人に聞きたい。」と声が上がってきってから、そのひとに出会わせることが大切である。子どもたちは、自分たちが望んできてもらったひとなので、学ぶ意欲が高まった。

また、いきなり出会うのではなく、事前にみんなでのようなひと（年齢・性別・性格・見た目など）かを話し合ったり、想像して絵に描くことで、会うことが待ち遠しくなる。そして、出会った時の、印象も強く心に残る。初対面の状況でも、子どもたちなりに何か思いをもって接することができる。(図2)

「ひと」だけでなく、「もの・こと」においても同様のことが言える。教師が一方的に出合わせるのではなく、子どもたちの意見を大切に合わせることも大切である。教師は、子どものひとり学習をしているノートや発言からしっかり子どもをみとり、事前に準備しておかなければいけない。

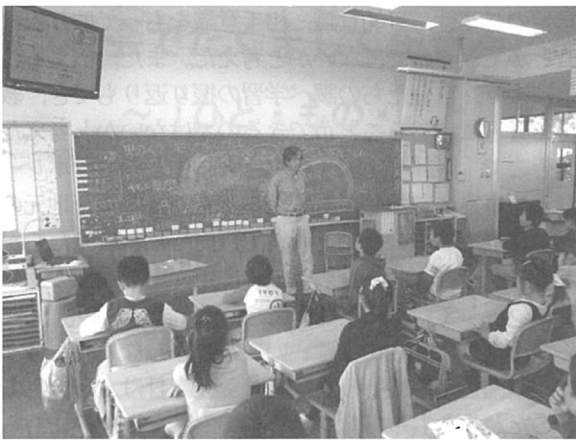


図2 : Fさんとの出会い

## 2. 4 総合で目指す子ども像

- ① 自ら社会的に価値のある課題を設定することができる。
- ② 課題に向かって全力で探究することができる。
- ③ 多くの情報から自分に必要な情報を取捨選択することができる。
- ④ 対象に対して、多様な視点で探究できる。
- ⑤ 対話を通して人の意見に共感したり、自分の考えを見つめなおすことができる。

## 3. 授業実践（世界一愛のある野菜作り）

### 3. 1 単元目標

- ・おいしい野菜を育てるためにはどうしたらいいのかというこだわりをもって全力で探究することができる。
- ・Fさんとの出会いを通して農家の思いやこだわりに気づき、自分の考えを見つめなおそうとすることができる。
- ・多くの情報から自分の野菜作りに必要な情報を取捨選択することができる。

### 3. 2 体験学習の良さ

野菜作りでは、学校の敷地内の広い畑を開墾することから始めた。そして、一人ひとりが自分の土地をもって、自分の育てたい野菜を育てた。

野菜は、自分たちで育てなくてもスーパーなどに行けば手に入る。しかし、直接自分たちで育ててみないとわからないこともある。今回は、子どもたちが無農薬・有機栽培にこだわって育てたいという思いをもって育てたので、たくさんの課題に出会うことができた。害虫が大量発生して、葉っぱを食べられたことや、水

をしっかりやっているのにも関わらず肥料不足によってあまり育たなかったことなど、多くの課題に出会い、解決していくことができた。そこから、「なぜ売られている野菜はあんなにも立派なのだろうか。」「どのような肥料をあげて、どのような場所で育てられているのか。」など、野菜を見る目が学習する前に比べて多様化してきた。また、自分たちでこだわって育てた野菜を自分たちで食べるだけでなく、地域の人にも食べてもらいたいから、地域の商店街で販売したいということになった。そして、実際にスーパーではどのように売られているのかを調べてみたいと考える子が多く、地産地消やJASの有機栽培の認定した野菜をたくさん売っているスーパーに見学に行った。見学の時に決められた予算の中で、自分が買いたいと思う野菜を購入した。子どもたちは、自分たちが無農薬・有機栽培にこだわって育てていることもあり、どこでどのように育てられているのかをじっくり見てからどの野菜を買うのか決めていた。これにより、子どもたちは、作り手の思いだけでなく、買い手の気持ちにも寄り添うことができた。この経験を活かして、野菜販売に向けて準備をしていった。(図3・4)

体験を通して、次への学びへとつなげたり、体験を振り返ることで、単なる体験で終わるのでなく学びを得ることができる経験へと高めていけると考えている。



図3 : 野菜が売られている様子を見学



図4 : 野菜販売の様子

### 3. 3 対話学習の中で

総合における学びの質の高まりを意識した焦点化とは、ひとり学習で調べてきたことを全体学習で他者と対話する中で、自分の考えが揺さぶられ、自己の思いを更新する場を設定することである。三位一体の対話を大切に全体学習をする中で、他者との見方・考え方の違いや自分自身の見方・変容に気づくことができることである。今回は、自分たちが育ててきた野菜を自分たちですべて食べるのか、売るのか（地域の人に食べてもらう）、送る（困っている人に食べてもらう）を話し合った。それぞれが育ててきたことを思い出し、根拠をもって自分の思いを伝えた。しかし、対話の中で自分の考えを揺さぶられる場面があまり見ることができなかつた。

### 3. 4 学びの質が高められた場面

子どもが野菜作りをしているすぐ横で地域の人が野菜作りをしている。子どもの一人が、自分たちの畑の隣にある野菜が自分たちよりも大きく立派に育っていることを気づき、自分たちも工夫して育てようと考えようになった。その子は、畑に藁があったことに目をつけ、すぐに家から藁を持ってきた。そこで、みんなでその藁が何のために必要なのかを考えた。藁は、土の乾燥を防いだり、雑草を生えにくくすることを知った。それから、藁を敷く子どもが増えた。しかし、藁が少ししか敷いていなければ風に吹き飛ばされてしまうことや、多くの藁はなかなか手に入らないことが分かった。そこで、藁に代わるものがないかを考えることになった。近所の畑で黒いビニールを使っているのに気づいた子どもがいた。そこで、何のために黒いビニールを敷いているのかを考えた。多くの子どもの予想は、藁と同じような効果だと分かっていた。黒いビニールはマルチシートだということを知っている子がいて、お店に売っていることまで分かった。それから、藁だけでなく、マルチシートを準備してほしいと言ってくる子どもが出てきた。一人の子どもが工夫していくことで、その工夫を真似しようとしたり、みんなの意味を考察することができる。それにより、その工夫が本当にいいのかどうかも含めて考える事ができる。工夫することにより、野菜の成長が目に見えて分かった。子どもは、「もっとこうしたい。」「もっと調べてみよう。」と思えるようになった。

### 4. 単元の考察

単元を通して、子どもが魅力的に感じる「ひと・も

の・こと」の出会いが子どもの活動を本気にしていったように感じた。自分たちの野菜に関する課題をほんまもんの野菜畑を直接観察し、こだわっている野菜農家のFさんに質問して解決できたことは大きい。

子どもは、野菜の作り手、売り手のことを知ること、野菜の大切さを感じることができた。家でも野菜の話をして、野菜を育てる子どもが増えた。

子どもの全員がFさんにお礼を言いたい、また会いたいと言い、多くの子どもがFさんのようにこだわってみたいと言っている。このことから、「ひと・もの・こと」との出会いを通して、社会でたくましく生きるための力がついたのではないかと考える。

### 5. 成果と課題

総合においては、自己の変容を可視化するために単元の導入、活動の節目、終末に作文を書いて、自らの変容を確かめるようにする。また、教室に学びの足跡を掲示することで学びを確認し、共有できるようにする。一人ひとりが個人ファイルに調べてきたことや考えを蓄積していくことで、新たな課題を見つけたり、学びを深めるようにする。そして、教師は、子どものひとり学習を個人ファイルや発言などでみとるとともにその変容を把握し、個々の学びを評価する。全体学習では、お互いの考えを伝え合う活動を通して、話し合いによる学びの質の深まりをみとり、評価する。また、学習の流れ、個人の思いが可視化できるように板書の工夫や振り返りの作文を書かせることで、自己への認識を更新し、新たな視点で思考することができる子どもを育てていくことにつながる。そして、「ひと・もの・こと」の出会いを大切に学んでいくことで、社会でたくましく生きていくための力がついてくると考える。子どもたちが自分たちのこだわりをもって野菜を育てることができ、学習する前と比べて社会に対する関心が高まり、もっと学びたいと考えることができた。しかし、最初の出合いは良かったが、出合いの回数や発信する場を増やすべきであった。回数を増やすことにより、そのことに対する思いが深まり、本気で調べ学習する力になり、根拠をもってしっかり発言する力になると考える。その点が不足していたので、対話によって子どもたちの考えがあまり揺さぶらなかつた。

どうすれば子どもが「ひと・もの・こと」の出会いを大切に、その関係を深めていくことができるのか探っていきたい。

### 参考文献

(2010・2011)

和歌山大学教育学部附属小学校記要 NO. 33・34